

パネルディスカッション

【司会】 それでは、お時間になりましたので、パネルディスカッションを再開させていただきます。

【今瀬】 では、後半の議論で移りたいと思います。少し予定より時間が押しているんですけども、もう一度パネラーの間で意見交換をさせていただいたあとで、是非会場の皆様からですね、いろいろな取り組みを含めてご意見いただければと思います。

私の方から最初に、また今田さんからもご指摘のとおり、今で考えれば非現実的な、全然今の状況にのっとらないような話のご提案をさせていただいたんですけども、ただやはりとにかく発想を一から変えないことには、このままでは何をやっても変わらないんじゃないかと思います。地方分権の論議をしても変わらない。沖縄で少女暴行事件が何年か前にありまして、当時、沖縄、太田知事と国とがぶつかったわけですが、国がある種の危機感を持って、沖縄にアメを投げて、結局その後、元の木阿弥に戻り、先ほど話があった脱力感のような状況があります。

そういった中で、今回、今日あと少しの時間の中で、みんなで何か共有化するものを見つけたいと思ってるんですけども。会場のご参加の方々も、それぞれ個別のフィールド、取り組みを持っておられると思いますので、なかなか共通の部分を見つけ出すというのは難しいかもしれませんが、是非そのへんを検討していければと思っています。

それですね、私の提案の後ですね、パネラーの3人の方にいろんなご意見をいただいたんですけども。その中でですね、大阪では沖縄の話聞く機会、しかもこういうテーマの中で聞く機会は少ないかと思うんですけども、先ほどは時間が限られた中でしたので、荷川取さんの方からかなり端折ってご意見をいただいたんですが、もう少し詳しくですね、沖縄が戦後米軍に支配されていた時代からですね、あるいはその前、日本政府に主権を取られてしまった今現在にいたるところで、なぜ、今そうなっているのか、経済的なところの板ばさみの中でジレンマに陥っているのかということ、もう少しお話しいただければと思うんですけども。

【荷川取】 時間の関係もあってですね、はしって説明したという部分もあるんですけど、実は、日本復帰のときに、先ほどちょっと触れたんですが、いろいろ議論はあったということなんですけども、現実的にはその当時いろんな議論の中で語られたことはほとんど実現しないまま今日に至っているというのが実態だろうと思います。まあ、当時、今現在、全国州制度ですか、州立みたいな形で州を設置しようかっていう話も出てきているみたいですけど、当時から沖縄だけは、46都道府県の中に同じような制度システムじゃなくて、別途特別州あるいは特別県みたいな形での復帰の仕方がいいんじゃないかという議論もあったということは聞いてます。その中で、なぜ現在のようになってきたかっていうことですね。日本政府の中央集権の中で、沖縄県は先ほども言ったように貧乏県っていうようなこともあってですね、ほとんど国からの財政支出でもって、当時沖縄県が掲げた目標が、他都道府県に追いつけ追い越せって感じですよ。行政的に沖縄県庁になった時点で、他の都道府県に一步でも近づいていこうというのが当時の行政マンの軸足だったんじゃないかなあと私は思っています。まあ、いろんな議論はあったんですけど、行政

としてはシステムとか制度というのは他府県に習う、その方が確かにやりやすいし、たぶん便利だったんだろうと、行政マンとしてもですね。ですから、県庁に入って中で見てみると、行政をやっていく上でいろんなもちろん規則とかありますけど、それはほとんどそれぞれ他の県に行って勉強してきて真似てつくってあるんですね。それぞれ、一県だけじゃないんです、例えば財務会計であるなら宮崎県であるとか、財産管理とかそういうものはじゃあどの県ってというようなもので、とにかく日本社会に、他の都道府県に、逆に近づこうというスタンスで、たぶん復帰の行政事務ってというのは進んでいったのかなあっていう感じがします。

その中で日本政府はもちろん復帰にあたってですね、振興開発計画を立てようということで、一応法律をつくって計画を立てて、沖縄県を振興しようということをやるとはいいんですけども、実はその振興開発計画の作成ってというのが、沖縄県の意見は聞くんですけど、最終的な決定はやはり国が行う。これはもう非常に当時も大変議論になったんですけど、決定権はやはり日本政府にしかないということですね。沖縄振興開発計画は、10年計画で3回延長されて、3回目が終わって、今度は4回目でこれまでの振興開発計画っていうのを変えてですね、別の名称にして新たな法律ができたんですけど、これまで3期に渡る沖縄振興開発計画っていうのは、国がすべて最終的な決定を行った。それで、県はもちろん素案みたいなことをつくって出すんですけど、最終的にやっぱり一番問題になるのが、米軍基地の扱いです。まあ、最初から経済的な基盤を確立していこうということになると、どうしても米軍基地っていうのは返還せざるを得ない状況の中で、県は段階的でもいいから返してもらって、そこに企業なり誘致していかないことにはこれは経済的な自立っていうのはないっていうことの方角性を出すんですけども、米軍基地絡みの部分は全部削除された形で最終的に決定されるっていうようなことも出てきます。ですから、3次に渡る振興開発計画の中でですね、政府はものすごい金額を投資して、沖縄の振興開発という名目でやってきたんですけど、実際にはそのお金をいただいてそれを消化するのに沖縄県庁はもうそれだけで精一杯といった状況にあると思うんですね。ですから、自主財源もないということもありますけど、自分たちで何かをしようというゆとりはほとんどなかったんじゃないかなあというのは実感です。

まあ、どうしても米軍の植民地支配の中では、絶対的な軍の力はあったんですけども、自分たちで税金は徴収して、そしてそれを自分たちで何に使うかは決めて、立法院というところでそれを審議して、あるいは法律もつくってやってきたと。そのちょうど復帰前のそのようなものはほとんど活かされないというような実態がでてきた。そういうようないろんな要素が絡み合って当時の自分たちのことは自分たちでやろうというようなそんな考え方はどんどん薄れていって、まあ、最近ではやはり何かやろうとしてもダメだ、無理だと、あきらめのムードになってしまっている部分もあるんじゃないかなと感じます。

【今瀬】今回、パネラーで、私の本当わがままで、遠くから石井さん、荷川取さんに来ていただいたんですが、どうしてっていうところですね。私が知りうる限りにおいて、豊島という地域は、これほど小さな地域でありながら、他に比べて自治力、自立力を持った地域というのは、そうそうないんじゃないかなあと思っております。今、NPOが救世主のような存在として話がありますけれども、昨今言われているようなNPOのようなものか、あるいはNPOとも違いNPOの議論にはない何かがあるのかもしれないと感じています。今の沖縄の荷川取さんのお話の中でも、今現在、米軍の支配化の時に主権を勝ち取るんだという形で一人一人が取り組みを行い、やっと主権を勝ち取ったと思ったら、今度は日本の政府、中央政府に主権を持っていかれてしまった。で、今、何とか取り戻そうとしても、また元の木阿弥で段々虚脱感みたいなものになるという話があったかと思えます。

私なりに、イメージを書かせていただきますと。(ボードにイメージ図を描く。)先ほど、私からも、

市町村は小さければ小さいほどいいんだ、というふうなご提案をさせていただいて、他のパネラーの方も同じようなご意見だったのかなあと思うんですけども。豊島も、香川県の高松からは遠く離れた小豆島の土庄町からまた離れた小さな島で、中央の東京はと言えば、ものすごく遠いわけですよ。しかも先ほど話があったように、公民館しかないんだってことです。沖縄も東京からもちろん離れています。で、先ほど経済力という視点でみたら、経済的な自立力は小さい、弱いんだという問題があるんだ、そういう見方をしたら問題があるんだという荷川取さんからお話がありましたけれども、そうでありながら、沖縄の人たちは、私が沖縄を訪れて知る限りは、生き生きとされているんですよ。

そういった中でひょっとしたら、例えば、極めて極めて極端な論理、逆説的な仮説ですが。これについて後ほど今田さんから是非ご意見をいただきたいと思ってるんですけども。豊島も沖縄も中央の東京からすごく遠いんですよ。しかも、豊島もすごく小さな小さな地域ですよ。で、そうでありながら、ある種自治力みたいなものであるとか、あるいは自立力、「立」と「律」の両方の力がありますけれど、そうしたものがありません。私が知る限りでは、沖縄は今では主権を国に握られているという話もありますけれども、沖縄の方とお付き合いする限りでは、すごく自治力は潜在的にあるような気がしてならないんですよ。先ほどの話から経済的な条件からしたら低いにもかかわらず、豊かな暮らしをされているという思いがあるんです。もし、そうしたとしたら、ひょっとしたら、ある一つの意味、側面では、中央の東京、あるいは大都市部から遠ければ遠いほど、小さければ小さいほど、自治力があるのではないのか、そのような傾向があるような気がするんですよ。かなり極端で強引な論理ですが。今の市町村の合併論議からして、まったく正反対の話ですけども。しかも、この傾向を支え、もっと持ち上げる力として、住民の自治組織やNPO的な動きの力があるんじゃないかなあって思います。で、これはあくまで、極端で強引な逆説的な論理で、そうではないかもしれないんですけど、その辺を含めて、今田さんから話をさせていただければと思うんですけども。

【今田】コーディネータが勝手に仮説を立てて(笑)、困ったもんだと思いますけど、私はそういう仮説はなりたないと思いますね。日本の歴史的な発展からいうと、日本の社会のベースになっているのは、いわゆる農村共同体ですよ。農村共同体が都市化する過程で崩れていって、それでどんどんと都市へ都市へと人間が移っていった。都市へ行った人達は、これはヨーロッパの中世の頃から、都市の空気は自由にするとということで、そういう共同体がいやだから出て行った人たちです。中央かどうかは別にして、都市というのはそういう意味でのコミュニティ意識というものが非常に薄い。それで自治というような形で自分たちで自立してやっていくよりも、税金を払って行政にアウトソーシングしていく。これは石井さんだったか、今瀬君だったか、行政が取り上げていったという話をされたけれど、逆に住民の側から言うと金で済むことならば自分たちでやりたくない、という形でアウトソーシングが進んでいったわけですよ。今でもあるのかどうかわかりませんが、松戸市で「すぐやる課」というのができて非常にいいという評価がその当時されたんですね。「すぐやる課」なんてとんでもない話だと私は思うんですけど。自分の家の前の道路にゴミが落ちていたら、それも「すぐやる課」でやりますというところまでいっちゃったわけだけでも、今度はそういうアウトソーシング社会というのがあまりにも行過ぎて、税金の負担があまりにも多くなっちゃったというのが財政的なことからいうと現在の行財政改革につながってるわけで、もっと自分でできることは自分でやろうよっていうのがコミュニティ復帰ですよ。遠いからとか、小さいからとか、そういう話ではなくて、やはり昔ながらの共同体的なものが残っているところは自治力も強いし、なんていうのか、自治力なのかなあ。例えば、このへんで言うと三田の農村部、三田というのはご承知のように昔ながらの古いところにニュータウンができてきた

わけですけども、三田の市民っていうのは旧村落へは入れないですね。私は直接調べたわけじゃないですけども、ご承知のとおり、三田に開学のキャンパスができて、開学の先生が三田のコミュニティを調べたんですけども、「今田さん、あそこは昔の共同体のままですよ」と言っていました。大阪まで電車で40分ですけど、そういうコミュニティというのがいっぱい残っている。確かにあんまり大きいと自治力っていうのは難しいと思いますね、一つのコンパクトにまとまらないと自治力っていうのは出てこないかもしれないけれども、でも遠ければいいっていうのは僕は全然根拠がないと思います。

【石井】不思議な振り方で。豊島に自治力があるかって言われたらちょっとそれはいろいろ疑問もあってですね。うまく行くときもあれば、行かないときもあります。それで、私は傾向的には(今瀬さんの仮説は)ある種言えるのかなあという気もしたりするんですよ。例えばこういうことなんです。ここにいらっしゃる皆さんにはほとんど想像つかないかもしれませんが。うちの島だとですね、けが人が出ても、急病人が出ても、119番通報するとですね、「そうですか、病人ですか、運んでください」と言うだけなんです。救急車は来ないですから。ええ、来れないんですよ。本土に救急車はいますけれども、2時間に一本のフェリーに乗って救急車がやってくるっていったら、まあ通報してから3時間後ぐらいなら着きますけれど、そんな待ってられないから運んじゃうんですね。で、私は遠いという関係はどうかなと思いますけれど、小さいところっていうのは結局今の地方自治であり、全国の話であり、基本的には行政がやってることっていうのは、皆さんから税金をお預かりしてそれを再分配していく、それから共通のルールを決めていくっていうのをそれぞれの単位でやっている、原則的な仕事ですから、そのお金を介してサービスをやろうとしたときに、一定以上効率が落ちる所には手が回らないんですよ。たぶん、沖縄の離島もですね、自衛隊のヘリが一応24時間対応しているとは思いますが、基本的に本土のように119番通報で救急車が来て病院まで行政体に任しておけば患者が運べるなんて環境が整ってるところはほとんどないだろうと思います。そういうところはですね、言い方を変えるとですね、自分たちでやるしか仕方ないという宿命を背負ったまんまで来てるから、そういう機運が今だにちゃんと残ってて、話し合ってたんとかがやっといこうよという土壌が温存されているんだ、そういう意味では僕はね、小さい、極端に小さいところっていうのはある程度自治力がありますよっていうのはそのとおりだろうと思ってるんですけども。

【今瀬】中央の東京から最も遠い、沖縄、しかも沖縄本島からも遠い遠い島がたくさんあるわけですけど、その辺、どうですか、荷川取さん。

【荷川取】なんか難しいですね。実は私は沖縄の宮古島っていう、さらに沖縄本島から200キロくらいですか、離れているんですけど、出身はそこなんです。小さいからという話がありましたけど、ほんとに小さな島でですね、周囲をクルマでまあ3時間ちょっとぐらいもあれば宮古本島一周回れるというところで、そこに4つの市町村があるんです。そこからさらに船で15分ぐらいのところに伊良部島っていう島があって、またそこは伊良部町っていう町をかまえてるんですけど。宮古圏域っていうのは宮古本島の4市町村と伊良部島と、さらに八重山の方に近い多良間っていうところ、ちょうど八重山と宮古島の間ぐらいにある小さな島ですけど、それは大体宮古圏域に入れるんですけど。沖縄では一番団結力が強いって言われてるんですね、宮古っていうのは。テレビ等でご覧になったこともあると思うんですけど、トライアスロンとかっていう行事をやってですね、市町村とかそんなのは関係なく島中の皆さんが出て、ボランティアとかやって、大いに盛り上がるというようなこともあってですね。何かやると宮古圏域は市町村の垣根を越えて

ですね、一致団結してやるというようなのは、沖縄でも結構知られていることなんですね。

夏休みとか宮古に里帰りしますと感ずることは、お年寄りのおふくろが一人住まいして、すぐ近くに一応長男がいるもんですから、いつも面倒見てもらってるんですけど。やっぱり島っていうのは行政の力っていうのはあんまりあてにしないんですね。自分たち自分の身の回り、自分たち隣近所のこと自分たちでやる、ていうような生活が常日頃から行われているんで、行政に何かを頼もうとすると逆に遠慮するっていうんですかね、「こんなことはやらなくていい」みたいなね。そういうようなのは年取ってるせいもあるかもしれませんが、逆に言えば「そういう自分たちのことは自分たちでやればいいんじゃないの」ていうようなことが、やっぱり小さな島の中で生活しているとどうしてもそうなるんじゃないかなあって気はしますね。

それと、先ほどアウトソーシングの話もあったんですが、昔、平良市のなかでもいなかの方で、役所がゴミを集めてくれるというニュースが流れたときは皆さん大変びっくりしたんですね。「こんなことまでしてくれるの」というね。それまでは当然自分たちのゴミは自分たちで処理するというのが当たり前のことであって、それを「役所がちゃんと集めるから、いついつどこどこに集めなさい」とか、そういうような話が地域に伝わったときにはみんなその話題でもちきりで、こんなことまで役所がしてくれるというのは、ありがたいという反面、「大変だなあ」というのがたぶん感想だったのかなあとと思いますけど。